

I 研究の目的

1 子ども中心の教育

本校は、子ども中心の教育を目指している。

子ども中心の教育とは、子どもが自分や自分の生活をよりよくしたいと願いをもち、その実現にむけて様々な対象との関わりを深めていく中で、もてる資質・能力を総合的に発揮していくような教育の営みである。このような教育を進めていくことで、学校教育目標にある「ともに学びをきりひらいていく子ども」に迫っていけると考える。

学校教育目標は、大目標としての「ともに学びをきりひらいていく子ども」と、それを具現化した子どもの姿として、「求め続ける子ども」「創り上げる子ども」「共に生きる子ども」の「3つの目指す子ども像」からなる。これら「3つの目指す子ども像」に期待する資質・能力が十分に育まれるためには、私たち教師が子ども主体の学習活動を試行錯誤しながら生み出す過程で、目の前の子どもをよく理解していく必要がある。子ども主体とは、教師が主体性を持たないということではなく、むしろ積極的に目の前の子どもを理解しよう、子どもと共に学習を創っていこうとする教師の資質や態度に支えられる。したがって、私たちは子ども中心の教育活動を模索しながら、目の前の子どもを深く理解していくことを、研究を進めていく上での前提と考えている。

2 目指す子ども像の具体の姿

私たちは、よりよい生活の創造に向かう自立した学び手を育てたい。具体の子どもの姿から見ていく。学校の中庭の改修に取り組んできたA児は、1年間の学びを振り返って次のような思いを綴った。

ぼくは、この一年間で今までの学びを全力で使い、さらに学びのハードルを上げて（目標を見直して）、一度へこみ、がんばって立ち上がった勢いで（中庭の）完成まで行くという、すごい大岡だったなと思いました。そして中庭が完成してぼくは、何やらふしぎで複雑な気持ちでした。うれしさはもちろん、本当なのか？ここは中庭？ぼくは、このような気持ちでいっぱいでした。

ここには、A児の体験したことが物語のように描かれている。願いの実現に向けて、自分の力を総動員し、落ち込んだり喜んだりしながら学びを進めてきたことが分かる。そして完成した庭を見て、本当に現実なのか、と不思議さとうれしさが混じり合った気持ちをもった。文章からは、強い達成感が感じられる。実際にA児は、中庭完成式で頬を紅潮させながら、「見慣れていたはずなのに、知らない場所みたいだ」とつぶやき、完成式が終わっても、いつまでも庭から離れようとはしなかった。

また、B児は中庭完成式を振り返ってこのように綴っている。

ぼくは、中庭完成は一生ないと思うんです。なぜなら、花がどんどん変わったり、クイズの内容が変わったりするなど、違う世代が引き継いでいくからです。完成していると思っても、実は物語が続くわけです。過去には、黒板を絵に変えたり、魚の像を作ったりしているわけです。そう考えると、中庭は完成しない……。そして、引き継がれていく……。

B児は、よりよい中庭にしていくために、中庭の過去の活用の様子や当時の先生、設計者、そして現在の大岡っ子や先生たちなど様々な人と触れ合い、その方々の思いを知っていったことで、庭の完成はあり得ないという考えをもった。中庭は脈々と大岡の子どもの学びの場として大切にされてきた場所であり、未来の大岡の子どもたちに引き継がれていく場所だと理解したことが分かる。また、一人ひとりの人たちにとって使いたい時に使いやすい場であるという「公共の場」としての特性についても、深く理解したことが読み取れる。

この二人の振り返りから、わたしたちは次のことを学ことができる。

強い願いをもって活動してきた子どもは、その願いの実現によって大きな達成感を味わうことができる。感動や喜び、驚きを伴って、自分達の活動や学習に意味や価値を見出している。そのような大きな達成感は、次の追究の活動への強い原動力となり、やがては困難な状況でさえも乗り越えようとする意志や自信を生み出すことにつながる。

また、そのような達成感は、対象に関する本質的な気付きが深いほど大きくなる。B児は、決して冷静に俯瞰して文章を書いているのではなく、むしろ大きな喜びの中で感慨深く、みんなのための場所が過去から現在、そして未来へと引き継がれ、みんなの学びの場として活用されていくのだという理解に到達したのである。

このように、自分の願いをもって対象に深く関わる中で、対象を大切に思えたり対象についての本質的な気付きを獲得したりしていく子どもを育てたい。そのような学びによって、子どもは達成感や成就感、自分自身への自信を深め、次の学びに対する期待や意欲を高めていく。自立した学び手として学び続け、自分の望む生活・暮らしを創造していく子どもを目指していきたい。

Ⅱ 研究主題について

1 研究主題

自分の願いや問いをもち、追究する子ども

2 主題設定の意図

「自分の願いをもち」とは、一人ひとりの子どもが自分にとって意味や価値のある「願い」をもつことである。「もっとうまくになりたい」「～ができれば、嬉しい」といった充実感や喜びにつながるような願いをもつことを大切にしたい。

大岡の子どもには、実現したいことややりたい自分像がはっきりしていると、意欲的に行動するというよさがある。そのよさが発揮されるためにも、はじめは「おもしろそうだ」「～できそうだ」という関心をもてるようにしたい。そのような関心事に沿って豊かな体験活動を重ねていくうちに、子どもは手応えを感じて、「もっと～してみたい」と新たな願いをもつ。また学級の仲間と話し合っって関心事を共有していくことによって、新たな願いや目標が生まれることもある。

こうして関心の高まりと共に「～を実現したい」「～のようにになりたい」と願いが膨らんでいく。「願い」とは、「明日、〇〇してみよう」「今度は〇〇に挑戦しよう」といった近い将来に自分のやりたいこ

とにとどまるものではなく、学級の仲間と共に叶えたい「未来に向かって実現したいこと、なりたい自分像」のことである。そのような高い次元での「願い」の実現に向けて、自分でしたいことやすべきことを見出し、意思決定しながら学習に向かう子どもを育てたい。

「自分の問いをもち」とは、**願いの実現過程において生まれる素朴な疑問や問題意識をもつこと**である。「問い」が、その学習における重要で本質的なものかどうかも重要だが、まずは**その子らしい対象への直接的な関わりを通じた問いをもつこと**を大切にしたい。例えば、きれいな花を育てたいと願う子どもは、ある日花が萎れかけているのを見たら、「どうしたら元気になるだろうか」と素朴な疑問をもち、花への関わり方を工夫していく。その後、きれいな色とりどりの花をクラスのみんなどで育てることができると、今度は「学校の花壇を花でいっぱいになりたい」「学校のみんなに、きれいだなと思ってもらいたいな」と新たな願いをもつことが考えられる。すると、「どこに植えると学校中のみんながきれいだなと感じてくれるのだろうか」と、より高次の願いを実現するための問題意識をもつだろう。それを解決するために、学校内の花壇の場所を調べたり、学校の植栽を大切に育てている技能員へのインタビューを行ったりするなど、追究の活動が広がったり深まったりしていく。

また、その子らしい追究の活動を通して、**より重要で本質的な問い**をもてるようになる過程も大切にしたい。そのような問いを解決していくことは、気付きの質を高めたり、概念的に理解したりして深く学ぶことにもつながる。深く学ぶことで、達成感や成就感などの手応えがさらに確かになっていくと考える。

3 主題設定の理由 ～昨年度の研究内容についての成果と課題より～

昨年度までは「願いの実現に向かい、豊かな自分を創る子ども」を主題に掲げて研究を進めてきた。昨年度は特に、1時間の授業における「見とり」「ゴール」「プロセス」を研究内容に設定し、1時間の授業の精度を上げていくことで、より確かに子ども一人ひとりに資質・能力を育成できると考えた。研究の成果は資料としてまとめ、授業者が今後も活用しやすいように整理した。

冒頭の具体の子どもの姿で示したように、3か年の「願いの実現に向かい、豊かな自分を創る子ども」の研究によって、大岡の子どもは確実に育ってきている。今後はさらに、大岡の子ども一人ひとりに、目指す子ども像に求める資質・能力を確実に育成していかなければならない。そのためには、一人ひとりの学びのプロセスにもう少しフォーカスしていく必要がある。具体的には、授業や単元を次の視点から改善していく必要がある。一つ目は、その子らしい追究が保障される時間と空間の確保である。単元の中に適切に個の追究場面を位置付ける。二つ目は、個々が「問い」をもてる授業である。そのためには教師の的確な見とりをもとにした、投げかけや発問が重要になるだろう。三つ目に、個の追究が常に協働的な追究の中で生きたり、あるいは協働的な学び合いが個の追究を加速させたりするような単元の構造である。

こうした考えから、今年度の研究主題を「自分の願いや問いをもち、追究する子ども」とした。

Ⅲ 研究主題を実現するための研究内容

1 子どもを見とる

教師は、子ども一人一人の対象の見え方には違いがあることを念頭に置きたい。学級集団としてひとつの願いや目的の実現に向かって活動していても、一人一人の探究の道筋は異なる。そこで重

要なのが、「見とる¹」ことである。1時間の授業の中で、子どもの内にどのような学びがあるかを見とるだけでなく、単元の初めと終わりでもどのような学びがあったのか、または1年の初めと期末や年度の終わりを比べてどのような変化があったかなども見ていくようにする。子どもを見とる際には、受容的、肯定的に、そして丸ごと子どもを理解し、期待を込めて見つめていくことを大切にしたい。教師の前向きで温かい目が子どもを育てるということを念頭に置いた上で、次のことに取り組む。

(1) 子どもを捉え、働きかける

○活動に向かっている時

- ・子どもの思いや考えに共感する
- ・子どもに活動の意図や感想、願いなどを質問する
- ・子どもの発想を価値付ける
- ・一緒に行う

○振り返りや観察カードへの記述を座席表等に整理する時

- ・学習課題に対する立場や考えの分布を見る
- ・意見の関連を見る
- ・対立する意見を見る
- ・本時のねらいに迫る気付きを見る
- ・本時のねらいとは直接関わらないが、価値ある気付きを見る

○話し合いの場面

- ・子どもの発言の理由となる体験・経験や考えは何かを捉える
- ・子どもの思考がどのように変化したかを捉える
- ・その意見は、全体の意見の中のどこに位置付けられるかを捉える

(2) 振り返りの質を高める

- ・体験や感覚を言語化する
- ・思考を促す語彙を使う（なぜなら、例えば、さらに、このように、つまり、一方で、など）
- ・自分で視点を持ち、選択して書く（発達段階によっては、教師から視点を例示することも考えられるが、自分で視点を設定できるよう促していく）
- ・達成感や成就感、喜びなどの手応えがあった場面では、その時の思いのままに書く

2 目指す子どものゴールの姿を具体的に描く

(1) 材の価値を深く分析する

- ・その材から広がる可能性のある学習活動、関わる対象を検討する
- ・その材だからこそ学び得る気付きや概念を明確に言語化する
- ・その材だからこそ学び得る気づきや概念が、各教科等とどのように関連するか見通し計画する

(2) ゴールの妥当性、明確性を吟味する

¹ 子どもを「見とる」ことについては、①子どもの姿や発言を丁寧に見る、聞く（捉える） ②子どもの思いや考えを理解する（解釈する） ③本時のねらいとの関係を考える（照合する） ④どのように振る舞うかを決める（判断する） ⑤分かりやすく板書したり、端的に発問したりする（振る舞う）の段階があるとする考えに基づく。（『深い学び』田村学、東洋館出版社、2018）

- ・大岡小で育成したい資質・能力一覧をベースに、子どもの発達段階や実態、今の学びの様子から、ゴールの妥当性を吟味する
- ・単元、小単元、本時の終末に、子どもがどのような資質・能力を発揮するのが明確な評価規準になっているかを吟味する

3 子どもの学びのプロセスを緻密に組み立てる

- (1) 個の「願い」や「問い」を生み出す個の追究のプロセスを緻密に組み立てる
 - ・単元づくりにおいて、個の追究の時間、空間を保障する
 - ・授業づくりにおいて、具体的な体験活動をもとに、「願い」や「問い」を言語化できる
- (2) 本質的な気付きに迫る集団追究のプロセスを緻密に組み立てる
 - ・単元づくりにおいて、個の願いや問いから集団の願いや問いが生まれ、高まるよう構成する
 - ・授業づくりにおいて、本時のねらいに迫る板書の在り方を吟味する
 - ・授業づくりにおいて、子どもが気付きを深めるための焦点化するポイントや発問を吟味する
 - ・授業づくりにおいて、学び合いを効果的に生み出す学習形態を吟味する

IV 研究内容を深めるための研究方法

1 授業研究会

(1) 目的

- ◎子どもの見とりや授業のあり方についての知見を蓄え、子どもの学びの充実に生かす。
- ◎部会や学年で相互評価することで、部会として目指す子どもを共有し、協働的に研究に取り組む。

(2) 進め方

① 事前研究会

- ・推進委員会で活動案の検討を行い、より子どもの学びが深まるための教材研究の視点の提示や活動の広がりの可能性などについて、授業者に具体的な助言・支援を行う。
- ・その後、拡大学年研究会で検討を行い、さらに学年研究会で細かい検討を十分に行う。
- ・研究授業日の前日までに、本時目標の妥当性、本時の板書の想定を行う。
- ・授業記録者、事後研究会の司会を一人ずつ決める。

② 本時

- ・参観者は、共同研究の場、勉強の機会として捉え、授業記録を取りながら参観する。
- ・教室前に付箋を2種類置いておき、気付いたことを書き留めることができるようにする（1種類は研究の柱に沿って、もう1種類は自由記述）。付箋は、事後研究会前に画用紙に貼れるようにしておき、直接伝えられない場合などに書いておく。
- ・部会の開始までに授業記録と板書写真を印刷する（部会人数+講師人数+3）。

③ 事後研究会

- ・部会では、授業者による自評は行わず、すぐに議論を始める。その際、1時間の中で現れた子どもの具体の姿や、振り返りで記述されたことをもとに、授業参観の視点に沿って議論を行う。
- ・議論は、授業記録の事実をもとに積極的に参加するように心がける。

- ・司会は議論の可視化のために、協議内容や講師の指導内容を模造紙に記録する（記録の仕方は自由）。講師からの指導については、色分けするなどして議論の内容と区別して記録する。

④ 当日の流れ

(午前中は短縮時程)	
12:45	給食終了 掃除 昼休み
13:25	5校時開始
14:10	5校時終了、下校指導
14:40	部会開始
	①4校時授業の協議(35分間) 講師の指導講評(10分)
15:28	②5校時授業について協議(35分間) 講師の指導講評(10分)
16:20	全体会開始
16:45	授業研究会終了(希望者は講師への相談をしてもよい)

⑤ 参加体制

- ・研究授業前日の検討会及び当日の授業、事後研究会には、原則的に、部会に所属するメンバー全員が参加する。ただし、養護教諭や栄養教諭、児童支援専任など役職の特殊性や勤務体系には十分配慮し、誰もが主体的に参加できる体制を維持する。

2 基礎勉強会

(1) 目的

- ◎生活・総合の単元・授業づくり、研究内容への理解を深める。

(2) 日程と内容

- 第一回 4月15日(金) ・子どもの姿、育てたい資質能力(九太郎)について
・種まき研修
- 第二回 4月22日(金) ・単元づくり研修(ウェビングから大単元構想まで)
・活動案形式について
- 第三回 4月28日(木) ・材の検討会(竹田先生のご指導をいただく)

3 夏季実践研究会

(1) 目的

- ◎自分の単元について振り返り、夏休み明け以降の単元の見通しをもつ。
- ◎部会として目指したい子どもの姿を共有する。

(2) 日程と内容

- ・自分の単元について、研究内容に沿って振り返り、夏休み以降の展開について相談する。
- ・部会としての成果と課題を整理し、部会で目指す子どもの姿を見出す。(日程未定)

4 夏季学習会

(1) 目的

- ◎最新の教育事情を学ぶとともに、大岡小学校の研究の意味を理解し、授業実践につなげる。

(2) 日程と内容

- ・軽井沢風越学園長の岩瀬直樹氏によるワークショップ(日程未定)

5 研究交流

(1) 目的

◎教育先進校を参観し、自分たちの研究を見直したり、価値を確かめたりする。

(2) 日程と内容

- ・軽井沢風越学園との相互授業参観
- ・第1回 授業を伴う基礎勉強会（0回授業研究会）に風越学園のスタッフが参観
- ・第2回 7月夏季休業中に、風越学園に授業参観（希望者）

※日程、内容については後日周知

6 部会研究提案（公開授業研究会にて）

(1) 目的

◎研究主題や内容と子どもの具体の姿を結び付け、部会としての成果と課題をまとめる。

(2) 内容と方法

- ・提案は、公開授業研究会にて7分前後で行う。
- ・部会長が基調提案をもとに研究内容に沿った構成で骨子を作り、部会で分担して作成する。
- ・部会内で、ひとつ（もしくはふたつ）学級の実践をもとに提案する。ただし、提案内容はどの学級の実践においても大切にされ、授業づくりの重要な要素となった部分を取り上げる。
- ・スライドや文書は、分かりやすくシンプルな表現を心がける。

7 研究のまとめ

(1) 目的

◎各実践者が子どもの姿をもとに単元・授業づくりの成果と課題を振り返り、次年度以降の個々の教員の実践力や意欲の向上につながるようにする。

(2) 内容と方法

- ・年度末に、研究内容に沿って、一年間の学級の子どもの姿をもとに単元・授業づくりの成果と課題を整理し考察を加える。

V 研究の構え

1 子ども観

本校のこれまでの優れた教育実践に通底する子ども観は、「子どもは本来、自ら成長したいと願う存在である」ということである²。子どもは、自分の力でやりたいことを見つけ、とことん向き合い関わっていく中で、意味のある学びを獲得していく。子どもを、未完成の大人として、鍛えなければならない存在としてのみ見つめていけば、教師はあらゆることを指導し、できるようになるまで鍛えてやらな

² 多くの優れた実践から学べる真理であるように思う。『はじめに子どもありき—教育実践の基本—』（平野朝久、学芸図書、1994）にも、いくつかの教育実践を根拠に、子どもが能動的学習者であることが示されている。伊那市立伊那小学校の教師が作った詩「子どもは未完の姿で完結している」が示唆に富んでいる。

ければならないと感じる。しかし、ふと子どものそのままの姿を見てみると、上から見ていては分からなかった小さな気付きや成長のドラマが、子どもの中にたくさん起こっていることに気付く。まずは、そのような子どもの見つめ方を、私たち教師が真摯に学ぶべきである。

中には、一見熱心に活動や学習に向かっていないように見える子どももいるだろう。しかし、もしかしたら、頭の中でじっくり考えてからでないと行動に移せない子どもかもしれない。心では対象に関わりたいたいと思っていながらも、どうしてよいか迷っているのかもしれない。

教師は、なるべくありのままに子どもを見つめるべきである。しかし、子どもの好奇心や関心を大切にするからといって、子どもが「やりたい」と言うのを待っているだけでは学びは成立しない。子どもの関心をさらに引き出し、高める工夫が必要である。その関心に沿って子どもがやりたいことを広げていけるように、教師もときには悩み、迷いながら、目の前の子どもにとって価値ある学びになるように試行錯誤していく必要がある。教師も子どもの学びのストーリーを共に創る人として、成長していく存在でありたい。

2 姿勢

(1) 教師個々人が学びを重ねる

- ・授業の質の向上を目指す

(ただし、「よい授業」をしなければならないのではなく、「優れた授業」を目指すこと³。「100点満点の授業」である必要はなく、「議論を生み出す授業」であること。分からなくてよい。分からないから、仲間と学べる機会を大切にする。そのために、教師が楽しむ。そして、切磋琢磨する。悔しい、もっといい授業にしたいという気持ちを大切にする。)

- ・どの子ども安心して自分を発揮できる学級集団づくりを目指す

(2) お互いの学びを尊重し合う

- ・子どもの学び、よい授業づくりに誠実に向き合う (教師—子ども)
- ・困り感や子どもの育ちをざっくばらんに言い合い、お互いの考えを大切にしながらよりよい研究を創ろうとする同僚性を大切にする (教師—教師)
- ・子どもどうしが誠実に向き合っているかに常に気を配る (子ども—子ども)

³ 横浜国立大学大内美智子先生の特別記念講演よりご示唆をいただいた(2020年2月15日)。「よい授業」より「優れた授業」を。「よい授業」は、指導案通り、時間通り、教師のねらうゴール=正答にたどり着く授業。もちろん、これを否定するものではない。しかし最も大切なことは、「優れた授業」にすること。「優れた授業」では、子どもの議論が白熱し、頭の中で汗をかいて考えている。十分に資質能力を発揮しているとする見方ができるのではないか。45分の中でより効果的・効率的な授業運びも大切だが、「指導案通り」に囚われず、真の意味で子どもが深く考え、自我関与する「優れた授業」を目指すべきであると考え。